

---

# とりあえず世界を救ってみる

狐狗狸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とりあえず世界を救ってみる

### 【Nコード】

N3460J

### 【作者名】

狐狗狸

### 【あらすじ】

面倒臭がりな端真案山子が退屈しのぎにとりあえず世界を救うお話。

## 序章（前書き）

明けましておめでとうございます。

前作とはかなり違います。

それではどうぞ……。

## 序章

「暇だなあ」

なんとなく呟いてみる。だからといって、周りで特に変化が起こるわけでもなく、いつも通りに退屈な時間だけが流れていく。

「……なーにしてんだろうねえ、みんな」

歩道橋の上に一人立っている端真案山子はしまかかしは下を過ぎ去って行く車の列を眺めながら呟いた。時刻は午後七時過ぎ。車の大群は案山子を照らす事なく、家路を急ぐ。

「つまりは待たれているという事ですか。羨ましいねー」

……いや、別に羨ましくはないか。

案山子は自分の発言を頭を振る事で否定した。

りん

と、唐突に背負っている刀が鳴った。

もう一度下を見る。

車が消えていた。一台も何も通らない。

遙か前方で嫌な不吉な、何か悪い事でも連想させるような、黒い煙がもくもくと立ち上ぼっていた。

「……相変わらずやる事が派手だな」

待たされていたこっちの身にもなれつての、馬鹿共が。

案山子は悪態をつきながら、歩道橋から車道へと降り立つ。煙の方を睨むと、煙に負けない不吉な気配を漂わせた一つの人影がのっそりところらに近付いて来るのが見える。

「やっと来ましたか……。散々待たせやがって……。この暇潰し共がっ！」

案山子は背中につけていた日本刀を鞘から抜きながら足に力を溜め、その人影に飛び掛かった

人影の方も迎撃しようと思腕を上げ、ごっつ、と空気を引き裂き、案山子を引き裂こうと腕を振り下ろす。

「つと……」

案山子は当たる一歩手前で止まり、辛うじて避けた。しかし、人影の腕が当たったであろう道路の挟られた部分を見れば、当たっていれば間違いなく跡形なく案山子はこの世から消えていたであろう事が容易に予想出来る。

「……………かはっ」

それでも。

そんな事でも。

案山子は 笑っていた。

楽しくて仕方がなく、愉しくて仕方がなく 際限なく笑みが零れる。

「かははっ、やるじゃねえか！ てめえは俺の中のベスト127に相当するぜっ！」

だがな、と刀を持った手に力を込める。

空気を裂く事もなく、音を奏でる事もなく、ただ無音で相手の胸を切り裂いた。

「てめえじゃ面白くねえわ。じゃあな」

案山子は刃を返し、今度は頭を切り裂く。

人影は霧になり、霧散した。

「あーあ、面白くねえ。待ち損じゃねえか」

案山子は心底つまらなさそうな顔をし、かはは、と快活に笑った。「まあいいさ。こんなもん、俺の中じゃ優先順位低いしな」

ファンファン、とどこからともなくサイレンが響いて来る。案山子はそれから逃げるように堂々とその場を後にする。

「さあて、暇潰しに行こうかな」

## 序章（後書き）

バトルものです。

よろしくお願いします。

## 一章 暇潰し（前書き）

今話は会話が多いです。

## 一章 暇潰し

『昨夜七時頃、車数十台を巻き込む事故が起きました。これによる死傷者は』

ビルの側面にある大きな液晶画面は昨夜の事故について報じていた。

「ふーん、そんなもんか」

案山子はコンビニの前にある車道と歩道を仕切る柵に腰掛けて先程買って来たサンドイッチを頬張りながらその画面を興味なさそうに見つめていた。

「あー……暇だな。面白い事でも起きねえかな？」

とはいえ、自分から行動する気ないけど。

天気は良く、日当たりの良いここでは少し心地良くて眠くなってくる。案山子は眠気を覚ますため最後の一口を口に放り込む。それでも欠伸が出た。

「ふあーあ……暇だなあ ん？」

軽く背伸びをする。その時、ふと気付いた。行き過ぎる人の大半が自分を見ている事に。それもそのはずである。

案山子の格好はこの辺りでは有名な進学校『私立大空高等学校』（略称『大高』、別称『真面目高校』、マジ高などと冷やかされる）の制服で、かつ、今は平日の午前十時。一般生徒なら学校にいる時間だ。さらに袋に包まれた長細い物を背負っているのだからなおさらだ。

「……………マズいな」

誰かにチクられでもしたら。

ぶるりと、案山子は自分の体を抱き締めて震えた。案山子は少し自分の想像力を恨んだ。

「うー……………仕方ねえな……………やる事もないし、やりたい事もないし……」

…戻るか」

戻った結果、死んだりして。

それは笑い捨てる事が出来ない程十分に有り得る可能性だった。

「ま、暇潰せるからいつか」

「で、今何時だと思ってるんだ？」

意気揚々と見えるように戦々恐々と「うーす」と挨拶しながら教室に入った案山子は、担任の久<sup>く</sup>繰<sup>く</sup>馬<sup>ま</sup>繰<sup>く</sup>馬<sup>ま</sup>からチヨークではなく黒板消しクリーナーを投げ付けられ、それを窓が割れないようにかつダメージを負わないようにキャッチするはめになった。だけならまだしも、キャッチした瞬間胸倉を掴まれ、宙に浮かされ、そのまま説教である。

「……………い、言い訳させてください」

案山子は苦しそうに言う。

ちっ、と繰馬は舌打ちをし、案山子を離した。案山子はふう、と一息吐いた。繰馬はその頭上に言葉を浴びせる。

「てめえのせいで全員が迷惑なんだ。己の存在を省みる。そんな奴でいいのか？」

「そんな奴に貴重な時間を割いていいのですか？」

「そんな奴に割く時間が貴重なわけねえだろ」

「でも時間は有限ですよ」

「悠久だからこの位大した問題ねえよ」

「でもこのままだと迷惑な存在がさらに迷惑な存在に昇<sup>クラスアップ</sup>段しますよ」

「自覚があるなら直せ」

「直らないからこそその個性でありまして」

「なら夏休みは私と一対一で特訓するか。休みの間だけで良い奴に仕上げてやるよ」

「遠慮しておきます。個性は大事にしたいので 混ぜるのは嫌な

のです」

「多少は混ざらんと浮いて排除されるぞ」

「そうなれば何をしても他の人に迷惑かかる事はないでしょ？」

「私の迷惑だ」

「先生の手は煩わせませんよ」

「もうすでに煩ってんだよ」

「……………」

「ほら、私の勝ちだ。さつさと席に着け」

「……今日の放課後、剣道場でリベンジします」

「は。私に一度でも勝つてから言え」

案山子に繰馬を睨み付ける勇氣はなく、ドカドカと荒々しい足取りで唯一空いている窓際の席に座った。

前の席に座っている神楽神輿かぐらみこしが話しかけて来た。

「相変わらずやるな。久繰馬先生に逆らう奴なんかこの学校じゃ多分お前だけだぜ」

「……まあ、暇潰しにはなるな」

「危険な遊びだな」

「そこっ！」

今度はチヨークが飛んで来た。辛うじて避けたそれは窓の外に飛んで行った。

繰馬は目を鋭くし、案山子を睨んだ。神輿は、自分は関係ないですよ、という顔で前を向き、姿勢良く座った。

「遅刻だけじゃ飽き足らず、私語までするか……。舐めてんのか？」

「ああっ！」

「いやー、舐めるなんてそんな趣味ないですよ」

「放課後……遺書、用意してろ」

「あ、俺も言いたい事あるんで放課後ちよい早めに来てください」

「……………ああ、わーったよ。だから今は黙れ」

「ういー」

案山子は適当な返事をし、机にもたれ掛かり眠った。



## 一章 暇潰し（後書き）

さて、2話連続投稿しましたが、次話はいっつになることやら。  
なるべく早く出来れば、と思います。

読んでくださった方に限界以上の感謝を。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3460j/>

---

とりあえず世界を救ってみる

2010年10月28日04時00分発行